

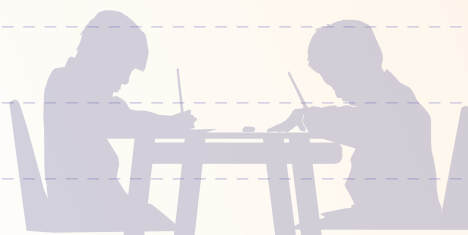


特集

「統一合判」
中学入試レポート vol. 4

私立中高一貫校の進学& キャリア教育が、どのような 成果につながっているか？

現6年生が挑む来春2015年入試に向けて、各私学の説明会ラッシュとなった10月～11月も過ぎ、すでに12月を迎えた。5年生の受験生の皆さんも、6年生の先輩たちに負けない真剣さで受験勉強に励んでいることだろう。この統一合判テストも今回で4回目。今回のテスト結果をうまく生かして、これからのステップアップに結びつけてほしい。保護者の皆さんにも、そうした視点で成績表や答案の見直しをお願いしたいと思う。今回は、再来年2016年入試でのお子さんの学校選びのために、私立中高一貫校の進学教育・キャリア教育がどういうことをめざし、その教育がどのような成果につながっているのかを、ここでご紹介しておきたい。



首都圏模試センター

10数年後の新たな社会を担う 子どもたちに求められる力とは？

わが子が再来年の春、中学に入学して、中高の6年間を経て大学や大学院を卒業して社会に出るのは、いまから11年後にあたる2026年以降。その時代は、世界やアジア諸国のなかでも経済的な競争はさらに激しいものになるといわれている。さらには競争だけではなく、世界各国の人々と意思を通わせ、協働・協調、そして共生を図りつつ、グローバルな意識や視点で物事を考え、国家や民族の壁を越えて、地球全体に課せられた諸問題を解決していく力が求められる時代となる。

いま、世界的なビジネスの第一線で活躍している保護者のなかには、10数年後の新たな社会を担う、わが子の世代に求められる力がどのように変化していくのか、すでに身近なこととして感じている方も多いことだろう。

わが子が将来、社会に出た後に、豊かで幸せな人生を歩んでほしいと考えることは親として当然の願いだ。そのために、子どもの時代から青年期にかけてのわが子の教育環境が、その土台となる力を育ててくれることを親は期待する。

教育が担うものが、個人の幸せと同時に、社会（民族や国家、世界）の安定（平和と繁栄）だと考えると、経済や政治など、さまざまな意味で「国境がなくなる」今後の社会では、グローバルに物事を考え、論じ、実現・実行することのできる人材が求められる。

そのためには、当たり前にならぬ英語で話すことができ、国や民族、文化の違いを越え、互いの意思や主張を尊重しながら理解し合える力が必要になる。環境やエネルギー問題など今の世界が抱えるさまざまな問題について、自ら問題意識を持ち、調べ、解決する、クリティカル・シンキングの力も



新たな時代に求められる力を説明会でも明確に示し、保護者の注目を集める海城中高。

必要になってくる。

そのような社会で、何か大きな仕事を成し遂げるには、必ず仲間のサポートが必要になる。そのためには、豊かな学力や知識・教養に加えて、対話的なコミュニケーションの力、多文化のもとで共生・協調できる力、人々をまとめリードする力を備え、多くの仲間と力を合わせて（コラボレーション）、双発的・相乗的な力（シナジー）を発揮できるような、幅の広い人間力が必要になる。

国境を越えてコミュニケーションできる手段としての音楽・芸術・スポーツなどの素養も、さらに大切にされる時代になるだろう。

また、そうした活動をするときの行動や考え方のベースには、人々の自由な意思（リベラル）や、公正さ（フェアネス）や正義（ジャスティス）、寛容（トレランス）などを大切にする精神性や意思の力、行動規範なども欠くことのできない要素となってくる。

このような人間的な総合力は、簡単に身につけられるものではない。だからこそ、人生で最も多感で吸収力のある中高生の時代に、これらの力の基礎になる学力や人間力を育て、さまざまなことを仲間と一緒に体験できる環境が私立中高一貫校



に期待される。

その豊かさや魅力を知るには、保護者にはできるだけ多くの私学に足を運んで、各私学がめざす教育のあり方や、発展・進化の方向性を感じていただくことが望ましいだろう。

わが子が「より良く生きる」ための私学の進学&キャリア教育

今回は、お子さんがチャレンジする1年2ヶ月後の2016年入試に向けて、あらためてわが子の「学校選び」を進めていくために、私立中高一貫校の多くが力を入れている「進学教育・キャリア教育」についてご紹介したい。

もともと義務教育の期間であり、卒業して社会に出るまでに最低限必要とされる学力を身につけるための「学習指導要領」が課せられてきた公立中学校や、その先の公立高校とは違い、多くの私立中高一貫校は、卒業後は高等教育（大学・大学院）につながる学問・研究の基礎づくりをする「進学準備教育」を行う中等教育（中学・高校）機関として発展してきた。

そのため、高校への進学率が98パーセントま

で高まり、さらに大学への進学率が約50パーセントまで高まった現在であっても、公立中学から公立高校へ進学し、卒業すると半数は大学以外の進路に進む公立学校教育とは違った「（大学への）進学準備教育」という側面を私立中高一貫校は持っている。

そのために、ほとんどの私立中高一貫校では、大学進学を前提とした教育課程（カリキュラム）やシラバスを組んで、高校卒業までの6年間で、大学での学問・研究につながる学力の育成や、学習姿勢の下地づくりをめざしてきた。

系列の大学を持たない中高までの「進学校」であれば、生徒が希望する進路に向けて大学受験をクリアできる力を育てるために、毎年の国公立大学の入試問題にも目を通し、中学入学から大学受験までを見通すことのできる教員が、6年間でどこまでの（どのような）学力を身につけさせるかという目標に向けて、遡って中1からのカリキュラムを組み立てる。

一方で系列の大学を持ち、大半の卒業生が推薦でその大学への進学ができる「大学付属校」であっても同様に、大学に進学してからの学問・研究に対応できる学力を育てるために、6年間の教育の組み立てを考える。

また最近では、一部の超有名大学（慶應義塾大学や早稲田大学など）を除くほとんどの私立大学の付属校が、自校の系列大学にも何割かは推薦で進学でき、同時にそれ以外の大学（医学部をはじめ系列大学にない学部や、系列大学以外の難関国公立大学など）にも受験して合格できる力を育ててくれる「半付属校・半進学校」タイプの中高一貫校になっている。そうした「半付属校・半進学校」では、先の両方の意味で、大学に合格、あるいは進学するために必要な（進学してから役に立つ）学力を生徒に身につけさせる教科教育の組み立て



女子のキャリア教育の先進校であり、同時に目覚ましい大学進学実績もあげている鶴友学園女子中高。

を工夫している。

なかには、古くは（創立時から戦前までは）家政・裁縫系の学校としてスタートした女子校であっても、女性の社会進出の増加にともない、そのあり方を変化させ、やはり生徒の多くが卒業後は高等教育（大学・大学院）に進学する「進学準備教育」のための学校へと姿を変えてきた。

現在の中学受験生（小学生）の保護者（父母）が中高生だった頃には、すでに多くの私立女子校が、そうした「進学校（あるいは大学付属校、半付属校）」に様変わりしていたが、まだ祖父母の世代には、創立期の家政・裁縫系の女子校だった頃の教育姿勢やイメージが記憶に残っている私立中高一貫校（豊島岡女子学園中高などもその典型か？）もあると思われるので、そうした女子校の変化や現状も知っておくといだろう。

“相互理解・協調・共生の時代”に必要とされる力を育む

そしていま、学校教育の世界で使われてきた「進路指導・進学指導」という言葉が表す意味も、時代の変化とともに大きく変わってきた。

現在では、単に卒業後の進路（大学や就職先）を選ぶための指針や相談、アドバイスだけではなく、生徒自身が将来の職業選択や生き方を考え、それを実現するための進路（進学先）選定や、その目標に向けての適切な準備（学習やアクション・プラン）が実現できるような、アドバイスや相談、職業見学や職業人による講演会など、生徒にとっての動機づけになる機会を提供することが、中高の教育に求められるようになっていく。



品川女子学院の「28プロジェクト」では、企業とのコラボレーションも体験できる。

そうした生徒の進路選択や意識づけのサポートを、多くの私立中高一貫校は公立学校に先駆けて実現し、それをバネに自校の中高6年間の教育をより充実させ、その教育の副産物として結果的に大学進学（合格）実績を大きく伸ばしてきた。

こうして私学の教育の成果が目立って伸びてゆく過程で、特に女子校や女子の教育に大きな役割を果たしてきたのが「キャリア教育」だった。現在では女子の最難関に近い位置まで入試レベルを高めてきた鷗友学園女子中高などは、そうした女子のキャリア教育の先進校といえるだろう。

当然のことながら、それは単に卒業後の大学を選ぶ進路選択だけではなく、将来の職業選択や、結婚・出産など女性にとっての人生の節目や、その後の職業復帰なども含めた「キャリアデザイン」を考えさせるものであり、さらに最近では、もっと長い目で自分自身の生き方やライフワーク・バランスをも考える「ライフデザイン」教育へと進化してきたケースもある。

品川女子学院中高の「28プロジェクト」、中村中高の「30歳のわたし」を考えるキャリアデザイン、栄東中高が中2で「20年後の履歴書」を書かせる「キャリアAL（アクティブラーニング）」、東京家政大学附属中高の「ヴァンサンカン（25歳）



・プラン」などは、そういう私学の「ライフデザイン教育」の一環で、とくに女性が自身の幸せを感じられる職業選択や生き方を考えていくキャリア・デザインのプログラムの典型といえるだろう。

私立中高一貫校の多くでは、そうした仕掛けが中高6年間の教育に組み込まれ、それが生徒の将来に向けた目標設定や目的意識を育てるうえでの大きな役割を果たしている。同時にそれが、日々の学習に向かうモチベーションを高めるきっかけにもなっている。

一方の男子校でも、たとえばサレジオ学院では「25歳の男づくり」という、わかりやすいネーミングを掲げ「奉仕する心を持つリーダーの育成」をめざしている。

また、このサレジオ学院と同じ神奈川の栄光学園をはじめとした多くのカトリック校では、「Men for Other's (他者のために生きる)」という共通のスローガンを掲げている。

たとえば志望する大学の合格に向けて努力をするのは、決して自分の(利益の)ためだけではなく、やがて社会に出て「他者に奉仕(貢献)するため」に必要なことだから。そうして将来、他者や社会のために貢献できる力を身につけるための前提として、目の前に大学受験というハードルがあるな

らば、それをクリアするために全力で努力をする使命があるというのが、多くのカトリック校に共通した考え方だ。

そうしたミッション・スクールではなくても、多くの私学は、この先わが子が社会に出る2026年以降のボーダーレスな時代には“共生”“協働”の力が求められることを前提に、そうした世界で「より良い社会」をつくる担い手となり、自身も「より良く」生きていける力を育てることを教育の目標に掲げている。その素地や感覚、視点を中高6年間で育てることが、現在の私立中高一貫校の「キャリア教育」のめざすところなのだ。

つまり、それぞれの私立中高一貫校は、生徒が希望する進路やキャリアを思い描き、その希望を実現するための学力の育成やサポートに力を注いでいるということだ。それは時代の変化や世の中のニーズにも柔軟に対応して、新たな時代に即した教育や学習指導を実践してくれるものと期待してよいはずだ。

男子と女子の成長リズムの違いを考えた私立中高一貫校の進学&キャリア教育

また私立中高一貫校には、もともと男子校、女子校という「男女別学」教育を行ってきた学校が多いことはご存知の方も多いだろう。

一方で、1980年代後半から現在までの約30年の間に、男子校、女子校から「共学化」した私立中高も非常に多い。そのため現在では、男子校などは希少な存在になっている。

いずれにしても男子と女子とでは、小学生～中学2年生くらいまでは、成長のリズムや精神年齢の発達スピードが違う。一般的には中学入学の段階で1歳～1歳半分くらい、女子の方が精神年齢が高いといわれている。それに応じて、多くの私

「Men for Other's (他者のために生きる)」というカトリック校に共通する理念のもと「25歳の男づくり」という教育目標を掲げるサレジオ学院中高。



立中高一貫校では、キャリア教育の導入学年や、学年ごとの仕掛けを違った形で工夫していることも知っておくとよい。

どちらかといえば、男子の場合には、まだ精神年齢の若い中学1～2年生の時期には、将来のキャリアや職業選択、進路（大学の学部・学科）を早くから考えさせるというよりも、中高6年の前半では自律的な学習習慣を身につけることと学力的な下地をしっかりと鍛えることに力を注ぎ、やがて精神的に成長して社会的な視野や問題意識を持つようになってから、じっくりと将来のキャリアや進路を考えさせていくケースが多いようだ。

一方の女子に対しては、男子よりも早い時期（中2くらい）から、時々将来の進路や、自分が希望するライフスタイルなどを考える機会を設け、それを学習の動機づけにもつなげていくようなキャリア教育が一般的だ。現実的、社会的な感覚が育つのが男子よりも早い女子にとっては、早い段階から自身の将来をイメージすることが、目標に向けて着実に努力をしていく動機づけになる。

こうした男女の精神的な成長・発達のリズムに応じて、私学の男子校や女子校ではキャリア教育を導入していくことができる。

さらに、男子と女子をともに受け入れている「男女併学（別学）校」である国学院大学久我山中高のように、男子部と女子部では違った時期・内容のキャリア教育（それにつながる教育プログラム）を工夫している私学もある。

共学校では、そのように精神的な発達リズムの異なる男子と女子が一緒に教育を受けているわけだが、そうした私学では、中学生の時期には成長の早い女子がリードする形で、将来の職業や進路選択のための体験学習に取り組み、逆に高校の高学年になったときには、逆に女子よりも（一般的に）チャレンジ志向が強くラストスパートの馬力もあ



男子部と女子部のキャリア教育に微妙な差異と工夫を加えている国学院大学久我山中高。

る男子が、大学受験に向けて強気の受験校選択をすることで女子にも良い刺激を与えるなど、互いの特質を生かすような形でキャリア教育や進路選択が行われている。

どういう形が、わが子の性格に合った、わが子にとってのより良いキャリア教育、進学教育なのかは、多様な私学の教育姿勢、プログラムのなかから保護者が調べて選択する必要がある。

こうした進学&キャリア教育のスタイルが、6年間の外国語（英語）教育や海外研修をはじめ、各教科の教育プログラムと不可分のものとなっているのは当然のことだろう。そして、一人ひとりの生徒の希望が実現できるように、大学受験というハードルに向けても、それに正面から突破できるだけの高い学力を育ててくれる。その結果が、現在の多くの私立中高一貫校の高い大学合格実績に結びついているのだ。

私立中高一貫校では、その継続性と時間的なゆとりを生かして、こうした進路&キャリア教育にも時間を割くことが可能になる。男子校・女子校・共学校いずれのタイプであっても、中学と高校の3年間ずつに分断された公立学校よりも、じっくりと「自分探し」ができる環境だといえるだろう。



この先も公立中高をリードする 私立中高一貫校のキャリア教育

最後に、ここでは2校の私立中高一貫校の進路&キャリア教育の実践例をご紹介します。

●洗足学園の「Mother Port School」

近年、神奈川県内で屈指の女子進学校として、難関私大はもとより、国公立大や医学部医学科、さらには海外大学にも合格者を輩出している洗足学園中高では、2012年度からは授業時間を60分→50分に短縮し、土曜を含む週6日制に完全移行。文理に捉われない全教科型のカリキュラムを導入し、グローバル社会に対応した「幅広く深い教養の構築」を目指している。

その洗足学園中高が標榜する「Mother Port School ～生徒が立ち戻れる『母港』としての学園創り～」構想とは、「生徒を大学に進学させればそれでいいのか？」「学校に与えられた時間は6年間だけなのか？」といった中等教育に対する疑問と切実な思いから生まれた、卒業後の支援プログラムである。社会の荒波に船出した卒業生たちが人生の転機を迎えた時、心の支えとして立ち戻れる場所、つまり「母港」としての学園創りを目指

している。

これまでも「成人を祝う会」や「30歳の会」などのホームカミングデーは実施されていたが、今年度からは卒業した大学3年生を対象に「就職活動セミナー」がスタート。在校生の父親の会「ファーズ」や卒業生の保護者で組織される「賛助会」の協力により、企業が求める人材や就活に対する心構えなどを学ぶ機会を提供する。

一方、卒業生からは「キャリアガイダンス」や「OG講話」などを通じて、自らの体験談を在校生に披露してもらうことにより、相互扶助の関係が良好に保たれている。学校と生徒、さらに保護者や卒業生が一体となって取り組む学園創りは「洗足ファミリー」と呼ばれる同校ならではのものといえるだろう。

●東京都市大学付属の「キャリア・スタディ」

一方、4年連続で「都内最多の」出願者数の記録を更新している東京都市大学付属中高では、男子校では珍しい「キャリア・スタディ」というプログラムを導入している。

昨春には2007年度から始まった「完全中高一貫」の第一期生が卒業し、前年を上回る難関大学合格者を輩出した。そして2013年度からは、生

徒の目指す進路や習熟度に応じて、Ⅱ類（最難関国公立大）とⅠ類（難関国公立私大）の2コース制を導入。中高一貫ならではのゆとりを最大限に活かした先取り授業と各種補習・講座で、生徒の難関大現役合格を強力にアシストしている。

この進学実績を支えているのが、男子の特性と成長を考慮したうえで開発された独自の学習システムと、主体的に将来の生き方を考え、これからの国際社会で活躍するための土台を構築する自分発見プログラム「キャリア・スタディ」だ。

「生徒が立ち戻れる『母港』としての学園創り」Mother Port School」構想を掲げる洗足学園中高。



校長の小野正人先生は「高校受験がない中高一貫教育において、中3・高1はいわば『中だるみ』が懸念される時期です。しかしこの時期は緩やかな曲線を描いて成長する女子とは異なり、男子が心身ともに急激に成長する時期でもあります。本校ではこの期間にあえてキャリア教育を施し『どのような人生を歩みたいのか』『どのような職業に就きたいのか』『どのように社会貢献したいのか』ということを徹底的に考えさせるのです。この段階で自らの将来像をイメージできれば、自分が進むべき大学・学部がはっきりと視界に入り、学力向上においても大きな起爆剤となることは間違いありません」という。

「キャリア・スタディ」は中3対象のプログラムで1年かけて行われる。5月の「スタート集会」には始まり、6月には自分を見つめ直す「自分史」の作成。7月の「身のまわりの社会人インタビュー」では生徒にとって最も身近な存在である保護者にインタビューを敢行する。「職業観・人生観を養うのと同時に、親子のコミュニケーションを図れると保護者にもたいへん好評です」と小野校長。

8月にはこのプログラムの山場となる「企業研修」が行われる。「キャリア・スタディ」最大の特徴は、全てのプログラムにOBが密接に関わっていることで、訪問企業はOBが勤務、もしくは関連している企業となっている。事前に行われるマナー講座では企業訪問の際のアポイントの取り方や社会人としての一般マナーを学ぶ。

企業研修の後は各自レポートにまとめ、班内で報告したのちクラス単位で最優秀チームを決定する。最終的にはお世話になったOBや関連企業の方、保護者・下級生を迎えて発表会を行う。さらに2月にはOBの現役大学生を招き、進路選択の観点や大学での勉強・生活について聴講し、進学意識の向上に努める。さらに「キャリア・スタディ」



男子校では珍しい「キャリア・スタディ」というプログラムを導入している東京都市大学付属中高。

で培った貴重な体験は高1で作成する「修了論文」にも活かされる。自分の興味・関心をテーマに4千字以上書くのが慣例だ。

「生徒たちは文献調査やフィールドワーク、時には住民アンケートにも取り組み、様々な角度から持論を展開しています。こちらの想像を超える秀作もあり、我々教員も毎年楽しみにしています。この論文作成は生徒が将来の方向性を決めるうえでも大きな契機となっています」（小野先生）

同校では高1修了時点で自らの未来像を描き、高2からの受験対策に邁進できる仕組みが構築されているのである。

「自分の夢を実現することは大切ですが、それが利己的なものでは意味がありません。スポーツ選手が苦しいのになぜ最後までがんばれるのか。それは自分を支えてくれた人やファンに対する感謝の気持ちがあるからです。だから途中であきらめない。本校の生徒たちが描く夢も社会と人類に幸せを寄与できるものであってほしいと願っています」と小野先生はいう。

生徒の夢の実現のみならず、社会貢献まで視野に入れたキャリア教育。この取り組みこそ、同校の躍進の原動力となっているのは間違いない。